

敦煌 法照和尚念仏讃 佐藤 哲英
吐蕃番文書より見たる唐代の郷保制

福原 亮敏
松本 善海

ウィグル文売買契約書の書式

山田 信夫

A四版・昭和三三〜三八年三月刊・
価四〇〇〇〜八七〇〇円全巻三九〇
〇〇円・法蔵館刊 (滋野井)

仏教倫理思想史

和 辻 哲 郎

和辻哲郎全集二十巻の刊行が終つた。

本書はその第十九巻、未発表であつた遺稿のノートにもとづいて公けにされたものである。解説(中村元氏)によると、原本のノートは、おそらく和辻氏が、大正十四・五年にわたつて京都大学で行なつた講義「仏教倫理思想史」のノートであると推測される。このノートをもとにして、後に「原始仏教の実践哲学」(昭和三年)および「仏教哲学の最初の展開」(昭和三年〜六年まで雑誌「心」に連載)があらわれるのである。従つて、本書の

第一篇「初期仏教」の中の第一章〜第三章は前者と、第一篇第四章の「阿毘達磨論における心理学的倫理学」および第二篇「大乘仏教」の中の「妙法蓮華經の考察」は後者と重複するところが多い。それにもかかわらず、本書の公刊された所以は、前述のもののほか維摩經・般若經と、中觀・唯識の哲学を加えて、一貫した体系的な倫理思想史であること、また著者独特の、ユニークな解釈が各所に見られることである。更に著書の思想遍歴を見る上にも、本書は欠くことの出来ない一巻であろう。たとえば本書にしばしば引用されているフッサールやデイルタの著作への言及は、現象学的影響のかなり強い「原始仏教の実践哲学」の思想解釈を暗示しているし、やや生硬ないまわしは——出版事情からいつて当然であるが——却つて綿密で直截な著者の学問のなまの形に触れた感じがする。著者の若い時代の仏教思想研究が、最後までその倫理学の方向を決定づける因縁となつたこと、和辻哲学全体の持つ豊かな抱擁性は、東洋的・仏教的な思想に基づくことを指摘する人は多いが、その意味で

は、四十年前とも見られる本書は、和辻哲学の根源たる価値を持つのではないかと思われる。

(阿部)